

第四百二十一回 青葉会 句会報

令和三年五月二十七日(木) 井の頭公園吟行  
午後一時半〜五時 句会 於：御殿山コミュニティセンター

選者 川口孤舟

出席者 今井紀久男 川口孤舟 久米五郎太 在間千恵 佐藤ただしげ 星田啓子 山崎亜也  
投句・選句 伊賀山そらお 柿崎忠彦 小早健介 朱牟田恵洲 土谷堂哉 豊田ゆたか 中川雅夫  
長谷見びん 福島正明 古田昇 宮内規雄 山田けい子 山内天牛 渡邊盛雄  
選句のみ 安部眞希子 重枝孝岳 庄司龍平 高橋敏郎 橋口隆 早川允章 山本三恵

《互選句》○は選者の特選 ○は孤舟選者の選

八点 ◎雨に打たれ川鶉一羽のみじろがず 紀久男 (孤・五・孝・恵・允・規・天・三)

七点 旅立ちの子よ振り向くな雲の峰 健介 (眞・忠・恵・○堂○正・昇・盛)  
風鈴や老いてこそ知る事もあり ゆたか (そ・○忠・孝・龍・堂・雅・亜)

六点 浮巢守る鳩の浮いては潜(かづ)きては 孤舟 (忠・○健・堂・允・啓・三)  
休業の貼紙空し梅雨に入る 亜也 (紀・千・隆・び・允・天)

五点 やはらかき細雨に烟る合歡の花 孤舟 (○孝・ゆ・○充・規・亜)  
◎新緑はトンネルとなり雨の中 千恵 (孤・○五・た・雅・け)  
木下闇煙草に憩ふ庭師老ゆ びん (恵・堂・正・亜・け)  
◎初吟行しとどに濡れし草茂る 啓子 (紀・○孤・○た・ゆ・隆)  
◎蓮の葉や水玉飽かず眺めけり 亜也 (孤・た・ゆ・隆・規)  
土俵際は鬼の表情風薫る 盛雄 (○眞・紀・五・龍・け)

四点 ワクチンの予約の済みて初夏の風 そらお (眞・五・昇・び)  
◎吟行の意欲殺ぎをる走り梅雨 紀久男 (孤・千・た・敏)  
◎梅雨激し病む師氣遣ふ井の頭 全 (忠・孤・五・盛)  
新緑の木々や輝く万華鏡 忠彦 (○そ・紀・た・敏)  
さみだれやしとどに濡るる雨情の碑 孤舟 (恵・允・正・規)  
はんだぎの頸を傾けて長考す 全 (○紀・孝・○恵・三)  
◎梅雨じめり動物園の門開かず 五郎太 (紀・孤・び・け)  
薫風や好きな茶房のテラス席 恵洲 (紀・○敏・允・正)  
◎天へ伸ぶ若竹の群古跡山 雅夫 (紀・孤・健・孝)  
注射など世のこの憂し梅雨に入る びん (紀・規・亜・天)  
黄砂避け海峡抜ける空母群 正明 (紀・忠・啓・○盛)  
走り梅雨入るや入らずや今日も雨 亜也 (そ・千・龍・啓)

三点 ◎弁天に鮎屋寄進の供養塚 紀久男 (孤・敏・昇)

死者残せし平和憲法記念の日  
梅雨模様けぶる水面や初吟行

忠彦 (真・紀・敏)  
千恵 (紀・隆・啓)

文楽吉田養助の引退

養助の華ある芸や春に去り  
新緑も憂さを晴らせぬ日のつづき  
一本道を人にまた訊く薄暑かな  
鶉の一羽見詰むる池や雨激し  
ウイグルの映像哀し五月闇  
風抱きてゆつくり揺れる朴の花  
黙々と夏みかんむく夫(つき)の午後  
灰汁抜きの筍下げて娘来る  
籠る日々「親鸞」に触れ星涼し

ただしげ (紀・健・け)  
ゆたか (そ・健・た)  
びん (真・五・天)  
啓子 (紀・千・孝)  
全 (堂・正・昇)  
けい子 (ゆ・○隆・亜)  
全 (紀・亜・三)  
盛雄 (龍・敏・び)  
全 (紀・恵・規)

二点

旧友逝く山吹手向け献杯を  
湧く泉集め始まる神田川

紀久男 (雅・盛)  
孤舟 (真・天)

◎梅雨寒や花子を悼む昔の句

フオー頼み句帳開きし夏の昼  
毒だみの十字の列や雨已まず  
ナポレオン死して二百年夏立ちぬ  
水雷艦長遊びし夏の日の遠し  
爺呉れし小庭に過ぐる鯉幟  
三人も乗せたママチャリ梅雨晴間  
子に繋ぐ父祖伝来の武者人形  
掛け声を上げて綱引く浜薄暑  
土の質(たち)色濃く継ぎぬ額の花  
亡き妻の向日葵のよな笑顔かな  
素揚げして鼻腔にうれし新牛蒡  
九つと卒寿に二つの五月かな

五郎太 (孤・忠)  
全 (紀・龍)  
全 (雅・け)  
全 (健・敏)  
千恵 (堂・○三)  
堂哉 (そ・紀)  
正明 (千・龍)  
昇 (そ・盛)  
全 (紀・天)  
啓子 (ゆ・び)  
規雄 (紀・健)  
亜也 (紀・正)  
天牛 (千・啓)

一点

◎雨粒に木々の緑は輝きて

短夜や今日は笑顔の日と決めて  
五月晴れようやく迎えた金婚式  
不要不急と言ふ不可欠や夏祭り  
薫風に朝のパン屋の香が混じる  
朝掘りの笑顔の友と筍と  
老鶯を聞きつコロナの本開く  
母見るやこの庭の春酒興の子  
繋がらぬ電話回線梅雨湿り  
コロナ禍や四波数へて五月闇  
我が身より高き向日葵咲きにけり  
人気なく如何に咲きけむ牡丹園  
ワクチンの接種の列の五月かな

健介 (三)  
千恵 (孤)  
ただしげ (紀)  
恵洲 (○啓)  
全 (ゆ)  
堂哉 (盛)  
ゆたか (雅)  
雅夫 (び)  
正明 (○昇)  
啓子 (昇)  
規雄 (隆)  
亜也 (雅)  
天牛 (紀)

【句評】

八点句

雨に打たれ川鵜一羽のみじろがず

紀久男

孤舟さん・・降り頻る雨のなか、池の鵜が一羽所在無げにジッと立ち尽くして  
いる姿は寂しい。

恵洲さん・・井の頭公園の池に居る鵜と拝察。鵜の姿が眼に見えるよう。

七点句

旅立ちの子よ振り向くな雲の峰

健介

恵洲さん・・子への期待と励ましの気分が雲の峰に適っている感じ。

堂哉さん・・巣立ち行くお孫さんでしょうか？君の選んだ道を信じて、精一杯歩むんだ。きっと  
この子には良いことがあるでしょう。コロナ騒ぎの今、元気を頂きました。

風鈴や老いてこそ知る事もあり

ゆたか

忠彦さん・・老いて気付く事が多々あります。ああ…「あの時の事は実はこう言うことだったので  
は」…と思うことばかりです。人生面白い！

堂哉さん・・季語が良いですね。

雅夫さん・・私も同じことを考え思うことが多いです。

六点句

浮巢守る鳩の浮いては潜（かづ）きては

孤舟

健介さん・・よく見る景ですが、躍動感ある表現が魅力です。

堂哉さん・・散歩の途中見掛けます。潜くという言葉を知りました  
休業の貼紙空し梅雨に入る

亜也

隆さん・・「緊急事態宣言」も長雨になった。

五点句

やはらかき細雨に烟る合歓の花

孤舟

孝さん・・眼前の風景と心の中の情景が見事に合致した句

新緑はトンネルとなり雨の中

千恵

孤舟さん・・樹々の枝が上の方で重なり合って、まるで緑のトンネルのようだ。

雅夫さん・・早梅雨そしてコロナ、天は外出をするなどいつているのか、でも新緑にはほっと  
する毎日です。

木下闇煙草に憩ふ庭師老ゆ

びん

恵洲さん・・馴染みの庭師も年取ったなあという感懐が感じられる。「植木屋さん、菜は好き  
かな？」という落語（「青菜」）が思い浮かびます。

堂哉さん・・長いお付き合いなので後継者はいるのでしょうか？庭師の出る落語を思い  
出して、DVDを探しています。

正明さん・・風景があつて落ち着きます。俳諧の本領は非日常かも。  
初吟行しとどに濡れし草茂る

啓子

孤舟さん・・初めて吟行に参加した。雨に打たれても草は盛んに逞しく生い茂っている。私もこの  
草にあやかかって、険しい俳句の道を究めてゆきたいものだ。

隆さん・・「濡れて」がいい。生命の源の水。

蓮の葉や水玉飽かず眺めけり

亜也

孤舟さん・・蓮の葉の上に留まる水玉の美しさに、しばし見惚れているのである。  
隆さん・・里芋の葉の水玉も見飽きない。

土俵際は鬼の表情風薫る

盛雄

眞希子さん・コロナのおかげで、すもうの実況放送をしつかり観るようになりました。不甲斐ない横綱が休場して若手の活躍が一層さわやかでした。同時に勝負に賭ける若人の鬼の表情に圧倒されました。

けい子さん・五月場所は熱い相撲だったですね。やる気のない横綱はいらないかも。

#### 四点句

吟行の意欲殺ぎをる走り梅雨

紀久男

孤舟さん・折角遠路吟行に出掛けてきたものの生憎の大雨。吟行気分も台無しだ。

梅雨激し病む師氣遣ふ井の頭

紀久男

孤舟さん・こうして句会に臨むと、以前お元気だった万里子先生と句座を共にしたことが思い出される。先生は如何されているか案じられる。

さみだれやしとどに濡る雨情の碑

孤舟

恵洲さん・井の頭公園には野口雨情の碑と旧家もあつたように記憶します。偶然かも知れませんが梅雨の風情が雨情の名前に良く合いますね。

はんざぎの頸を傾げて長考す

孤舟

恵洲さん・恥ずかしながら歳時記で「はんざぎ」が山椒魚のことと知りました。井の頭公園にある小さな水族館に居ると記憶します。擬人表現に山椒魚の感じが出ています。

紀久男・休園で見られなかった大山椒魚。貌をみるのを楽しみにしていたのですが・中七、下五の表現気に入りました。

梅雨じめり動物園の門開かず

五郎太

孤舟さん・動物たちに会うのが今日の大きな目的だったが、コロナ禍の影響か閉園となつており、誠に残念だ。

薫風や好きな茶房のテラス席

恵洲

敏郎さん・このコロナ期。こうした憩いの場も残っているんですね。ホッとします！

天へ伸ぶ若竹の群古跡山

雅夫

孤舟さん・若竹が青々と勢いよく丈を伸ばす様が、「天へ伸ぶ」でうまく表現されている。

走り梅雨入るや入らずや今日も雨

亜也

龍平さん・「雨そほ降る…起きもせず寝もせで夜を明かしては春のものとながめ暮らしつ」業平さまも 共寝の無い雨の一夜は これまた さぞかしと 感じられたことでしたか 人の脳は100年経っても変わらない」

#### 三点句

弁天に鮎屋寄進の供養塚

紀久男

孤舟さん・池畔の弁財天の灯籠の台座には「翹町商人・紫染屋」と刻まれている。また供養塔は鮎屋が寄進したのであろう。江戸商人の信仰の深さが偲ばれる。

梅雨模様けぶる水面や初吟行

千恵

隆さん・初吟行の行く手が案じられる。

ウイグルの映像哀し五月闇

啓子

堂哉さん・かの地のことはもっと頻繁に大きく報道して欲しいです。

風抱きてゆつくり揺れる朴の花

けい子

隆さん・「風を抱く」表現の妙。

籠る日々「親鸞」に触れ星涼し

盛雄

惠洲さん・・コロナで籠る日々を親鸞に触れる機会にされる姿勢に敬意。季語の使い方も上手い。

## 二点句

旧友逝く山吹手向け献杯を

紀久男

雅夫さん・・多田君は元気な人だったのですがね・・寂しいです。

梅雨寒や花子を悼む昔の句

五郎太

孤舟さん・・2016年5月26日の井の頭吟行会で、象の花子を詠った句が出された。句会を終え駅への途次、奇しくも花子の訃報を知った。

毒だみの十字の列や雨已まず

五郎太

雅夫さん・・この草は人間に役立つのに何故毒とつけられたのでしょうかね。

水雷艦長遊びし夏の日の遠し

千恵

堂哉さん・・懐かしい！何十年ぶりに聞く言葉でしょう。私は足が遅いので、艦長にはしてもらえませんでしたが。汗だけで帰宅して、行水が気持ち良く、今夜のオカズは何？と母に尋ねていました。

土の質(たち)色濃く継ぎぬ額の花

啓子

びんさん・・確かに。植木市の花小鉢を庭に下ろしたら翌夏には見事に変色していました。

酸性・アルカリ性の土壌により化粧直しするようです。季語では「七変化」という別名もありますね。

## 一点句

雨粒に木々の緑は輝きて

千恵

孤舟さん・・新緑はたとえ雨に打たれても、その輝きを失ってはいない。

繋がらぬ電話回線梅雨湿り

正明

昇さん・・ワクチン接種の予約電話が繋がらない句でしょうか？憂鬱ですね。もうウンザリ。季語が良く効いています。

我が身より高さ向日葵咲きにけり

規雄

隆さん・・向日葵の高さで生命力が生まれる。



## 次回青葉会

六月二十四日(木) 午後一時半～四時半 竹橋 パレスサイドビル 赤坂飯店  
当季雑詠5句 投句は3句まで。六月二十三日(水) 午前十時半締切とし、  
今井宛 FAX か手紙、星田宛メール (keiko-reve@07.itscom.net) いずれでも結構です。



## 令和三年五月 青葉会報

一、雨天決行。土砂降りの中、コアメンバー(五郎太、千恵、ただしげ、啓子、小生)揃い出発しましたが行き交う人も殆どなく、茶店休業。池も鳩と川鶉各一羽、椋鳥二～三羽、魚影少なく、弁天様の社務所のみ開いていました。動物園も休園の為、早めの昼食をとることに。

「萬緑」吟行時代から良く利用していた中華料理店がベトナム・フレンチの店に変わっており、これが正解!でした。ベトナムの焼きそば(フォー)ランチセットが素晴らしく美味しく、ボリュームあり、五郎太さんの句にありますように句帳を開きました。昼近くなり若い女性客で埋まり、ベトナム人の店員も皆若く好印象で皆さん御満足。

二、一時過ぎに句会場に入りますと、予約して下さった亜也さんがテーブルを除菌、拭き掃除をしておられ恐縮しました。孤舟選者も加わり七名となりました。

いつもの五郎太さんが披講役され、ご覧のように、小生、健介さん、ゆたかさんが高得点で皆さまのレベルが高くなつたように思いました。

広島の社友の田部修司さん寄贈の一升瓶「名譽酔心」(純米大吟醸)・小生がリュックに入れていたものを、ただしげさんが吟行中に背負つてくれ句会で楽しみました。ただしげさんは途中、でんでん虫を見ついたり、飛ぶ燕を指さして教えてくださいました。そのただしげさんが金婚式の句(五月晴れようやく迎えた金婚式)を出され、皆さん乾杯で祝いました。啓子さんから焼き鱈の干物(ベトナム原産、伊予市で加工)・酒のあてに最高!と手造り揚おかき寄贈、亜也さんからも地元・俵屋の絶品饅頭頂きました。

三、関係者近詠

会ひたくて食べて欲しくて露の臺

眞希子

寄り合うて蜂起の構へ葱坊主

陽亮

ローマ字表札増えぬ団地も物芽時

全

啓蟄の早やも恪勤蟻の列

全

コロナ禍

全

放哉を口遊みつつ青き踏む

全

ヒヤシンス体温も記す出勤簿

全

主夫の手がいつか主婦の手菜飯炊く

全

悼 鈴木龍江様

弘子

リウマチに眠れぬ春夜妣想ふ

紀久男

百年を生きて往く空帰白鳥  
棘黒く眠る枳殻や春まだき

全

新版歌舞伎 〃野崎詣  
菜の花やお染久松三味に乗り

全

三日目のスープとろとろ牡丹雪

全

ミモザ来て花舗さびきびと動き出す  
通学路下見の母子朝の梅

全

「森の座」6月号

宇宙から還り来しひと大南風

盛雄

籠り居へ旅ガイド届く立夏かな

健介

人知れず葉かげに香る柚子の花

全

薫風や家事の上手な主夫となり

全

吾子と酌む八十七の親子鮓

全

疫病神吹き飛ばさぬか大南風

全

篠寝椅子今も昭和の夢を見る

全

抜歯てふ鬼の告知や青風

全

花街抜け南風の吹く知恩院

紀久男

南風吹く「風評被害」にあらがいて

全

寄席はねて冷酒立ち飲む酒都伊丹

全

「きさらぎ句会」五月

竿先は大海原や建国日

盛雄

—— 毎日新聞 兵庫文芸五月二十六日 若森京子 特選

(評) 魚釣りをしながら作者はふと思った。この海は世界へと拡がっている。そして私の座っている場、日本は今日建国日だ。十七文字が最大限に拡がった瞬間だ。

新緑や園児らの声大空へ

允章

柏の花の葉蔭にひそと匂ひけり

全

片雲の奔る速さや聖五月

全

四 五郎太さんの紀行文「春の大和・吉野」より句のみ列挙させていただきました。

伝説に向かひ手を打つ神武天皇祭

石楠花や西に浄土の當麻の地

神奈備のお山を歩く春の旅

揚雲雀京（みやこ）の跡の広き空

川辺には歌垣ありし山桜

難波より来る街道花菜風

※ 尚、芭蕉の三句も添えておられます。

五 五月中旬に終了したNHKテレビ小説「おちよやん」は、主演の杉咲花がはまり役で視聴率トップの大好評でした。モデルになった浪花千栄子の昭和三十年代、人気最高のラジオドラマ「お父さんはお人好し」には、小生の同期入社・松永成己君（二年前 癌死）が四男坊「沼吉」で出演しており、会社の上司に選択迫られたこと憶えております。男前のインテリで女性にモテモテでした。

紙数尽きましたので、何時かまた、ご報告したいと思っております。

令和三年六月八日

紀久男

記